
Antagonisten

高宮 かしお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Antagonisten

【Nコード】

N5623T

【作者名】

高宮 かしお

【あらすじ】

グレイテルを取り巻く悪魔フロリアンと聖人ニコライの物語。悪魔が人間に執着した時、人間は不幸の沼に引きずり込まれるのか。それとも進んでその身を沈めるのか。聖人は迷える子羊を救い出せるのか。それとも悪魔にひれ伏すのか。「グレイテルと悪魔」の続編です。ストーリー重視、それでもなるべく簡潔に、を目指しています。と、あらすじは偉そうですが、中身はそうでもないです。

1 回想

フロリアンは大木に背を預け、青草の上に胡座あぐらをかいて座っていた。

空には薄いヴェールを広げたように雲が漂い、その青をぼかしている。日の光をちょうど良い具合に遮る梢がのんきに揺れている。見渡す限り緑一色の空地进行、小川が、そこだけ鏡をちりばめたように煌めく帯となってゆるやかに横切り、その脇でグレーテルがしゃがみ込んで立ち上がり、一心に花を摘んでいる。彼女の周りで、からかうように二匹のモンシロチョウが舞っている。

あんなところにはいないで自分の上で、猫のように体を伸ばして休めばいいのに。

彼は彼女が自分の上にいるところを思った。

オレは彼女の三つ編みをほどき、手を広がる髪に滑らせる。そしてもう一方の手でスカートの上からその丸尻を撫で、ゆっくり、だんだんとスカートをたくし上げて中に手を滑り込ませる。靴下留めの境の辺りを指でなぞる。普段は靴下留めなんかつかないで素足だが、まあ、構想としてはそっちのほうがいい。靴下との境の柔らかな股に指を沈ませるようにして。そんな風にしたら、きつと彼女は尻を微かに震わせて、その甘い刺激に耐えようと密度の濃いために息を漏らすに違いない。靴下留めの紐をたどるように指をさらに上へ滑らせる。何度も、何度も往復する。羽毛で肌を撫でるように。指先ですうっと。感じやすいグレーテルはその時にはすでに湿っているに違いない。

そうしたらぐったりとした体を脇から持ち上げて、オレの上に座らせる……それから………

「フロー！」

名前を突然呼ばれ、フロリアンは我に返った。目を上げると、向こうでグレーテルが花束を片手に、もう片方の手で大きく手を振っていた。

「もう少しだから。待っててねー」

彼女は離れたフロリアンに届くよう、声を張る。

「もう十分だろ。ちよつとこっちに来いよ」

夢想の浅瀬に立っていたフロリアンは出来ればすぐにもそこから上がり、自分が思いを馳せていた相手の体温を感じたくなかった。彼女の存在を、重みとして。

それでも彼女は歯を見せてにっこり笑うと、また紫の一角にしゃがみ込んでしまった。

フロリアンは短いため息をつくとき空を仰ぎ、目を細めた。

ー暑いな

木陰では風は涼しいくらいだったが、悪魔の彼には朗らかな日差しは強く、そのせいで少し目眩を感じた。彼は頭を木の幹に持たせかけると目を閉じた。

あの灰色の森で母、魔女と共に住んでいた記憶が果実酒が発酵するよつに、ふつふつと浮かんできた。

フロリアンはーもつとも、フロリアンという名前は彼が人間の姿になった時の仮の名前だったが。ウアル、これが彼の名前だった、は、魔女の96番目の一人息子だった。そして魔女にとって最後の子供になった。魔族の中では珍しい雄でもある、ウアルを魔女は溺愛した。彼は姿をカラスに変えられ、さらに術をかけた鳥かごにい

れられて寵愛を受けていた。たまに外には出してもらえたが、決まって魔女の監視下であり、少しでも遠くへ飛んで行こうならばすぐに魔法で連れ戻されるのだった。

ウアルの属する魔族は成体になりにくく、そのためにとにかく数を増やさなければいけなかった。魔女たちはひたすら子供を産み、増やすことが課せられた主な役割だった。しかし、年を取りすぎた魔女は子供を産む体力をつけるために”人間の子供”を糧にしなければならなかった。

事実、魔女は”お菓子の家”で森に迷い込んだ子供たちをおびき寄せ、捕まえては喰っていた。

ヘンゼルとグレーテルが魔女に捕まった時、ウアルは鳥かごの中でその小さな頭を少し上げ、すぐに漆黒の羽の間にくちばしを突っ込んで寝てしまった。

ー またか

そう思っただけだった。

外の檻に入れられたヘンゼルにグレーテルは朝から晩まで食事を運んだ。魔女は彼の”食べ頃”を、その指を握って確かめていたが、グレーテルの入れ知恵でヘンゼルは鳥の骨を差し出し続けた。目の力が弱っていた魔女には、子供の指も鳥の骨も見分けがつかなかった。

骨を握るたびに魔女は「まだだねえ」と首を振った。

ウアルはこのグレーテルのやり口が珍しく、一部始終を見ていたのにも関わらず母に告げ口するようなことはしなかった。

グレーテル。彼女は他の子供たちと違って、掃除中にほうきの柄を鳥かごに突っ込んで彼を怒らせるようなことはしなかったし、その上、ほとんどまともな食事を与えられていないのにも関わらず、まるで上澄みだけのスープから小さな肉片をつまみ出しては、そつと鳥かごの中に入れてくれた。

やせ細った大きな、思慮深い瞳を持つ娘に、ウアルのなかの”興味”という水瓶の水がひたひたと水かさを増やしていった。

あ のとき、なぜ母に忠告の一声を上げなかったのか。甲高く一声鳴けば、魔女は後ろに立つグレーテルに気がついただろうに。

とうとうヘンゼルを食う日、特別なスープの大釜の中をかまどの前でかき回していた母の後ろに、グレーテルは気配を消して立っていた。

彼は次に何が起こるのかすべてを察していた。彼には未来を見る力があつた。

その小さな娘が、細い、頼りない腕を伸ばして母の背を突き飛ばすのをなぜ止めようとしなかったのか。

ぎゃああああああああ

グレーテルは魔女を煮え立つ大鍋に突き落とした後、鳥かごの横の柱に引つ掛けてあつた鍵束を掴むと、一目散に家を飛び出した。魔女の悲鳴は響き渡っていた。

”オレも連れて行ってくれ！！”

彼はかごの中で狂つたように暴れ、騒いだ。しかし、彼の鳴き声は母の叫びにかき消され、むなしくも黒い羽が舞い、散つた。

魔力のかかったかごから出るのは容易ではなかった。そして、自分にかけられた魔術も解く術がなかった。

結局、自分が”真の姿”であるラクダのウアルとなつてかごを破り、外に出ることが出来た。

そのとき初めて、自分がどれだけ力を持っていたのか、そして母の魔術の殻を力づくで容易く破る^{たやす}ことが出来るほどの成体になっていたという事実を知つた。

それまでは自分は本当に”かごの中の鳥”でしかなかったのだ。

そう言う意味では母を殺したグレーテルに礼を言うのが筋なのかもしれない。

「……ろー、フローってば……寝ちゃったの？」

顔を上げると、目の前にグレーテルの顔があった。フロリアンを覗き込んでいるその大きな灰色の瞳に含む緑色は、青草の緑に焼けただからか。

フロリアンはとっさに腕を伸ばし、彼女を捕まえると自分の脚の上にその体を乗せた。

「いやだー」

グレーテルは彼の脚の上をまたがって座る格好となり、スカートが大きく広がった。それでも逃げようとはしなかった。彼は彼女の背にそつと手を回した。

「ほら、見て。綺麗でしょ」

グレーテルは花束を顔の高さに持ち上げた。フロリアンはその花の向こう側の、グレーテルの顔をじつと見つめる。その視線に気がついたのか、彼女は落ち着きなく視線を逸らせた。

「ここ、すごいね。こんなにたくさん種類の花があって……」

グレーテルは彼の慈しむような視線を受け、困ったように笑いながらなんとか会話を引き出そうとする。まるで、口元を忙しく動かしていないと体中がその視線に感じがらめにされてしまいそうだった。

「うん。それで？」

「あ、あっちにニワトコの白い花も見えたの。きっと大きな木があるわ。明日、はさみを持ってきて花を摘みましょう。シロップをたくさん作って売れると思うわ」

「うん、それで？」

依然、フロリアンはグレーテルを見つめたまま、背にまわした手に少し力を入れた。

「ほ、ほら、水仙でしょ、リュウキンカにリンドウ、ケシ、アザミにジギタリス……ね、綺麗な花束、あんたに全部あげるわ」

「花よりもお前の方が……」

何となくその言葉の先を察してか、グレーテルの頬が見る見るうちに赤くなる。もう、彼女にはなにも言うことは残っていなかった。

「……うまそう」

「へ？」

そんな……と文句の言葉を継がせる暇を与えずにフロリアンは彼女の唇を自分ので塞いだ。

ずっと我慢していたんだ。

突然のキスにグレーテルは、んん、と抗議の声を上げたが、それもフロリアンに飲み込まれてしまった。彼女はやがてあきらめて、花束を抱えていた手を下ろした。

「あ……」

フロリアンが少し唇を離して言った。

「おまえ、ミントの葉を食べたね？」

グレーテルは既に焦点の定まらない目をなんとか彼に合わせようとぱちぱちと瞬きをした。

「うん……さつき茂みを見つけたから」

「うまい」

「嫌いじゃなかったっけ？ 強い香草……」

グレーテルはしゃべると触れてしまう彼の柔らかな唇にドキドキしながらなんとか言葉を返す。

「お前の舌と一緒に味わうと、うまいのな。発見」

そう言うと、フロリアンは再びグレーテルのミントの葉のような小さな丸い舌を絡めとろうと顔を傾ける。

「ふう……」

グレーテルは次第にくったりして彼に体を預ける。

「あ……」

再びフロリアンは顔を上げた。

彼は美しい眉を寄せ、グレーテルの体を少し離す。彼は彼女の肩越しに、こんもりとした茂みの向こうを見つめる。

「どうしたの？」

「邪魔が入った」

グレーテルも顔だけ後ろに向け、彼の視線の先を追う。

ガサガサ

茂みが揺れそこから姿を現したのは、二人のよく知った人物――司祭のニコライだった。

彼はいつものように黒いスータンを着て、薬草の入ったかごを手にしていた。裾に近づくとつれやや広がっている聖職服は、まるで彼の体の一部のようにびたりと美しい体のラインの上を流れていた。

「……………」

二人に遭遇するとは思っても見なかったニコライは、ただ言葉を忘れて立ち尽くしていたが、やがて大きく息を吸い込み、彼らの座る木のもとに慎重に足を運んだ。

グレーテルの手にしていた花束はいまや草の上に横たわり、彼女はフロリアンの胸に置いた手を知らず知らずのうちに強く握っていた。フロリアンは彼女を守るかのようにぐっと体を引き寄せた。

ニコライは二人の近くまで来ると、かごを下にそっと置いた。そして自分も膝を折った。

「こんにちは……………まさか、こんなところで会うとは……………」

「おまえに用はねえよ。グレーテルが怖がっている。失せる」

嫌悪を隠そうともせず、フロリアンは聖職者に言葉を吐きかけた。ニコライはその言葉には少しも動じず、グレーテルの方を遠慮がちに覗き込んだ。

「許してもらおうとは思っていません……………ただ、あなたには謝りたいのです。私の、謝罪の言葉を受け取って欲しいのです」

グレーテルは小さな子供ののように、フロリアンの胸に顔を埋めて

しまった。

自分を陵辱した一一体を裂かれなかったにしろ、心をずたずたに引き裂いた男の話など聞きたくはなかった。少しでもこの男に心を動かされていたからこそ、それは屈辱であり、絶望だった。そのうえ、彼は自分を守るうとしたフロリアンの息の根まで止めようとしたのだ。

ざあ……

風が梢を揺らした。三人の上で光の斑点が踊った。まるでここだけくり抜かれた世界のようにあたりは静寂に包まれていた。

「……私に何をおっしゃろうというのです」

くぐもってはいたが、はっきりとそれはニコライに聞き取れた。彼は、グレーテルが少しでも彼の言葉に反応したことに安堵を覚えた。少しでも聞く耳を持ってくれたということに。

ニコライは静かに、グレーテルに語りかけた。

2 免罪

肩で揃えられたプラチナブロンドの髪は光の加減では藤色にも輝く。愁いを帯びた瞳に乙女のそれにも見まごう、程よく朱に染まった上品な唇。

「グレーテル……」

ニコライの唇は彼女の名前を低く呼んだ。しかしその後、いつまでたっても言葉は紡がれない。

その沈黙にグレーテルは振り向かされた。そして、ひとり分ほど離れた草地に膝をついているニコライの目と出会った。

「やっと私の顔を見てくれましたね」

青年は弱々しく微笑んだ。

「……」

グレーテルはまだ半身をフロリアンに押し付けるようにしていたが、今度はフロリアンに顔を向け、その漆黒の瞳をじっと見つめた。瞳の主は、軽く頷く。

グレーテルはフロリアンの肩に手をつき、体を支えて立ち上がった。ぼそぼそと取り繕うようにスカートの前をはたいた。その行為は、人目に付かぬ場所とはいえ、昼間から男の膝の上に座っていたことを恥じているようにも見えた。

ニコライも黙って立ち上がった。グレーテルは彼に数歩近づき、不安げなまなざしで自分の前に立つ麗姿を下から見上げた。

「その後、お変わりはありませんか」

最初に口を開いたのは、グレーテルだった。最後に彼の姿を目にしたのは二月ほど前^{ふた}だっただろうか。あの夜のことはい出したくなかった。だが、司祭を見て彼女が眉をひそめたのは、かつてはその美しい円やかな頬の肉が、今ではげっそりと削げていたからだった。それは痛々しいくらいだった。

青年の瞳に影が落ちた。

「あのときはあなたに酷いことをしてしまいました。本当に申し訳ありませんでした……」

グレーテルは頭を垂れた。体が細かく震えている。

「……この話には触れない方がいいのかもかもしれません。それでも、私が自分の行いであなたに深い傷を負わせたことをどれだけ後悔しているか、わかっていただきたかったです」

グレーテルはまだ顔を上げようとしなかったが、司祭は続けた。

「……私はあれから大分変わりました。すっかり心を入れ替え、神に仕える聖人として恥じないよう、修行の日々を送っています。断食と、祈りと」

「その修行はまだ夜中に地下礼拝堂でも続いているんだろ？ カワイイ子羊たちと」

フロリアンは音もなくグレーテルの背後から近づき、守るようにその小さな肩を抱いた。その言葉に突かれたように、グレーテルは険しい表情でニコライを見上げた。

「いえ……あのようなことはその後一切ありません。そしてこれからも二度と。神に誓って」

「騙されるなよ、グレーテル。こんなヤツの言うことなんか。エロ聖人、もう用は済んだだろ早く帰れ。わからねーのか、グレーテルが震えているのが」

ニコライは自分を睨みつける黒ずくめの衣装を着けた悪魔に目もくれなかった。そして首から掛かっている銀の口ザリオを手で握りしめながら、控えめに、しかし力強くグレーテルに訴えた。

「グレーテル、私を許してください。私はあのときとても弱かった。あなたの瞳の輝きに目がくらみ、そのバラ色の声こわねに心が揺さぶられたのです。あなたが許してくださるまで、私は水以外口にしません。その結果、近く神の使い手が私を呼びにこようとも」

「おまえが単にヤリたかっただけだろ。グレーテルのせいにするなよ。この期に及んで見苦しいぜ。許すことなんかないからな、グレ

「テル。こいつはちょっとばかり顔がいいから調子に乗ってるんだ」
ニコライは大きなため息をつき、始めてこの悪魔の顔を見た。

「……君はまた横からいちいち余計な茶々を入れてくれるね、ラクダ君。まあいい、僕は君と争うためにここにいるのではないのですから。あなたとの争いは何も生み出しません。ただ……グレーテル、私はあなたの美しさを罪だと咎めているわけではありません。美しく咲くバラの枝を折ろうとする自分を止められなかった私の罪なのです。自分が罪の被害者だとはいいません。それでも……お願いです。あなたの口から許すと、ニコライを許すと聞かせただけないでしょうか。それはやはり贅沢な願いでしょうか」

「ああ、相当図々しい願いだと思っぜ？ 出直せ？ いや、もう来るな。たとえグレーテルが許したとしても、オレが許さねえからな」

「ラクダ君……」

「ラクダじゃねーフロリアンだ」

ニコライは呆れたようにフロリアンを見る。

「だいたい、どうしてあなたは悪魔のくせに恥ずかしくもなく聖フロリアンを名乗っているのですか？ 鎮火、消火の守護聖人の名をおこがましいと思わないのですか」

「おまえに関係ないだろ。あのオッサンの魂はオレがもらったんだよ。生前は結構いい仕事してたのにも関わらず命令に反したからって処刑されるって、なんか、残酷だよな、人間てさ。まあ、キリスト教徒を庇った罰だったかな、だから結構天使の間では希少価値が付いてみたいけど、あいつら鈍いからさ。フロアの首が刎ねられたと同時にもうオレの手の中よ。まあ、そう言う縁でオレはフロアの名を語ってるんだけど」

グレーテルは下ろしていた視線を上げて悪魔を見上げた。彼の名前にそんな由来があったなど今まで知らなかったのだ。

「そういうのを”縁”というかは私にはわかりかねますが」

ニコライはグレーテルに懇願の色をたたえた瞳を向けた。

「それでも、今日のところは諦めます、グレーテル。しかし、私は

あなたに、あなたの”心”に誠実に、ゆっくりと向き合って行ければいいと思っています。それは厚い雪の下で春を待つ一粒の種が、いつか息吹くことを夢見るように。私はあなたが再び心を開いてくれることを毎日祈っています。あなたは、私の希望なのです」

グレーテルはフロリアンに肩を抱かれながらニコライをじつと見据えた。怯えはすでに消えていたが、警戒は依然そこにあつた。

「まだごちゃごちゃ言ってるのか。早く行けよ」

「それでは、近いうちに……」

「一生来るな」

フロリアンは背中を向けて去っていくニコライの背に吐き捨てた。その直後、彼はグレーテルがすつと息を吸ったのを聞いた。

「……許します。司祭様、私はあなたが私にしたことを許します」

フロリアンはあまりの驚きに二の句も継げず、腕の中の女をただ見下ろすだけだった。ニコライは茂みに入っていくところだったが、風に乗ったグレーテルの震える声が彼の耳に届くと、立ち止まり、ゆっくりと肩越しに振り向いた。

「今、なんと……？ 私があまりにも許しの言葉を望んだので、蝶

の羽音がそのように聞こえたのでしょうか」

「ああ、そうだろうな」

「フロー、黙って」

グレーテルはびしゃりと彼の言葉を払った。

「司祭様、もう一度だけ申し上げます。私はあなたを許します」

今度はよく通る声できっぱりと言った。ニコライはその場で体をグレーテルに向け、胸のロザリオをうやうやしく唇に押し付けた。

「ありがとうございます」

そして、静かにスータンの裾をひるがえし再び茂みの中へ姿を消した。そして風がおだやかに梢を揺らした。風はたつた今去っていた訪問者の気配を消し、何事もなかったかのように小鳥が小川のほとりに降りて来、水浴びを始めた。

「なんであいつを許すんだよ。おまえ、あのとときオレが助けにいか

なかったらどうなっていたかわかってる？ あの男に最後までやられるところだったんだぜ？ そんなヤツを許すの？ それとも何？ やっぱりあいつを切るのが惜しくなった？」

グレーテルは悪魔を下から軽く睨んだ。それもつかの間、その顔には諦めたような色が浮かんだ。

「フロー、それは違うわ。私が司祭様を許さないってことは、そのことにずっとこだわり続けることなのよ。こだわり続けるってことはあの出来事も、司祭様のこともずっと頭のどこかにあるってことなの。実際、今までそうだったわ。でも、正直疲れちゃった。確かに私は傷つけられたし、傷ついた。でも、傷つけた方も、ものすごく傷ついているわ。罪に気がつき、神に告白したんだもの。フローもみたでしょ。司祭様、あんなにおやつれになって。その姿を『ほら、みたことか』ってあざ笑うほど私は人を強く憎めないの。憎むほど人が強くないの。そういう1つの思いに執着すればするほど、それに捕われて動けなくなるわ。そういう憎しみや執着は早く手放してしまった方がいいと思うの。それに、そんな気持ちをもち続けていたら、いつかは悪魔に付け込まれるに決まってるもの」

「それって、オレのこと？」

フロリアンは薄く笑い、グレーテルの腰に腕を回して引き寄せると、彼女の顔の周りで遊ぶ細い髪の毛の束を指先でひねった。グレーテルは相手の顔をまともに見れずに、うつむいた。

「そ、そうなの？ フローは私に付け込んでいるの？」

「んー。逆のような気もするけど。オレの方がおまえに付け込まれているような……」

悪魔は腕の中の娘の顔をおかしそうに覗き込んだ。

「そうか、オレ、焦ったよ。おまえがあいつとよりを戻すのかと思っただ」

フロリアンは何でもないふうを装ってはいたが、あときは焦ったところではなかった。グレーテルが司祭の背中に『許す』と声をかけた瞬間、急に胸がむかつき、何かが体の中で煮えたぎり、口の

中に苦いものが広がった……彼にとって不愉快この上なかった。

グレーテルは頬を火照らせ、慌てて顔を上げた。

「よ、よりって……司祭様とはもともと何も無いのにどうしてそんなことを言うの?!」

「だって、おまえあいつのこと好きだったじゃん。それに、あいつもまんざらでもなさそうだったしな……心が揺さぶられた、って言うてなかった? お前のこと口説いてるのかと思っただよ」

「そそそ、そんなことないよ! だって私はフローが……あ」

「オレが、何?」

口元には穏やかな笑み、だが視線は彼女を試すような光を帯びている。こんな顔をしている彼から逃げられた試しが一度もない。それを何度も経験しているグレーテルは降参のため息まじりに言った。

「……好きだもん」

それには返事をせず、フロリアンは目を細めると身を屈めて彼女の首筋に唇を滑らせる。

「あ……なにっ?! 私ちゃんと……」

グレーテルはもがいたが、腰に回した彼の手にさらに力がこもっただけだった。

「言っても口だけじゃなあ。だから体にも聞いてみようと思っただよ。ワンピースのV字の開きを合わせる紐を上からするりと器用に解いていく。グレーテルは唇の動きから逃げようとぐいぐいと彼の胸に顔を押し付ける。そんなことをしてもフロリアンには全く無意味だ。」

そして徐々に熱くなるグレーテルの肌を手のひらで直に感じつつ彼は柔らかな白い丘の間に顔を埋めて、ほくそ笑んだ。

3 実感

フロリアンと暮らし始めてグレーテルの生活上変わったことといえば、朝の仕事前に全身を拭かなくてはいけないことだった。今の季節ならまだ水に濡らした布を絞ればいいのだが、寒さの厳しい冬には、朝の茶のためだけではなく、そのためにもっと湯を沸すことになるだろう。

もし、この生活が冬まで続けば。

グレーテルは水の入った桶に布を浸しながらため息をついた。ふと手を止めて、悪魔の、恋人が眠っている奥の寝室の方へゆらりと視線を流した。

それもつかの間、やっと白み始めた空が正面の窓から入り込み、連なる山の頂を縁取る光線がグレーテルの顔を照らすと彼女は眩しさに目を細めた。そして裸の上半体は光に白く輝いた。

グレーテルは昨夜、フロリアンに言った自分の言葉を反芻していた。

まるで彼の気持ちを確かめるような言葉だった。いや、本当は確かめたかったのだ。

彼女は、フロリアンが初めてグレーテルの前に姿を現した、彼のそもそもの目的であった『子づくり』の話を蒸し返したうえで、『子どもを作りたいならまず結婚しなきゃだめだ』と切り出した。

悪魔に”結婚”ほど不相応な言葉は無い。家庭を持つ悪魔の話など聞いたことが無い。ましてや教会で式を挙げる悪魔なんているだろうか否、いるわけがない。

そんなことはグレーテルは重々承知していたし、案の定、フロリアンは鼻で笑った。『そんなの悪魔に関係ないだろ』と。

それでも彼女は引き下がらず、加えて『結婚をしなければ子どもは”父無し子”として街の人から酷い扱いを受けるだろう。自分は何を言われてもいいが、子どもには辛い思いをさせたくない。でも神が私たち二人を結びつけることを許さないだろう』と言った。

彼を説き伏せられるとは思えなかった。

以前フロリアンはグレーテルに、子どもを作ったらすぐに自分から引き離し、魔女に育てさせると言った。彼女はそのときフロリアンに異を唱えた。いくら悪魔の子でも自分の子どもなら側に置きたいと。彼は『悪魔の子どもを育てる』と言い切った彼女に呆れ顔を見せた。

しかし昨夜は、彼女の言葉に彼はこう答えたのだ。

『オレは諦めない、おまえは余計なことを考えるな。オレがなんとかする』と。

それは彼女の思いを受け入れたと思っただけではないか。子どもが生まれたら、三人一緒にいたい、という彼女の願いを聞き届けた、そのために『なんとかする』と彼は意志を見せたのではないのか。

せめて、そう思いたかった。しかし、心のどこかでは、そんな希望は捨てるべき、と警告している自分もいた。

グレーテルはいつもひとりだった。

母の死後、父もヘンゼルも側にはいたが友達と呼べるような者はただの一人もいなかった。それゆえ、今自分が三ヶ月間近くフロリアンと共に衣食住を共にしていることを未だに現実として捉えがたいのが本音だった。彼の隣にいて笑う日々。自分を飽くことも無く求める彼。自分が求めれば常にその腕で柔らかく、時にはしっかりと包んでくれる彼。彼と過ごす時間がいまのグレーテルには至福であった。しかし、そんな幸せは永遠に約束されるものではないとグレーテルは常に自分に言い聞かせていた。

幸せはやがて壊れる。

いや、そもそも自分は幸せになれるような人間ではない。結婚なんて夢の夢だ。ましてや子どもと、好きな人と暮らしていけないなんて。

グレーテルは我に帰ると、フロリアンの昨夜の愛の残滓を拭い去るべく、スカートをまくりあげ、布で肌を擦った。

畑に水を撒き終わり、鶏のえさを取りに馬小屋へ向かう途中、家から出て来るフロリアンに会った。彼はいつもと変わらず、くるぶしまで隠れるほどのマントをまとっている。その下も全身黒尽くめであることは間違いない。

「オレ、ちょっと街まで出てくる。朝食の支度はしてあるから。すぐに戻る」

声に抑揚はなかったが、普段グレーテルにだけ見せる笑みを浮かべた。

「ありがとう」

グレーテルもにこりと笑みを返した。そして森の小道を去っていくフロリアンのマントの背を見送った。

これまで”寂しい”と思ったことはあまり無かったが、この瞬間だけは、フロリアンが遠のいていく瞬間は胸の奥がちくりと痛んだ。もう自分のもとへは帰って来ないかもしれない。

なぜかそんなふうに思うと寂しさが彼女の身を包んだ。グレーテルは自分の身を抱くように腕を何度かさすった。そして諦めたように馬小屋へ足を向け、朝の残りの仕事を片付けると、自分のために用意された朝食が待つ家へ入った。

朝食を終え、茶を飲んでいると表で自分の名を呼ぶ声がした。

「あっ、そっだ。今日はネリオが来る日だった」

グレーテルは慌てて立ちあがり、エプロンの裾で口を抑えると、庭に飛び出していった。

「おはよう、グレーテル」

人なつこい顔に、そばかすの目立つ少年がロバの横でにこにここと挨拶をした。

「おはよう、ネリオ。ごめん、あんたが来ることすっかり忘れてたわ」

「大丈夫。ぼく、少し早く来たから。鉢を運ぶの手伝うよ」

ネリオは左足を引きずるようにしてグレーテルに近づくと、再び白い歯を見せて笑った。ネリオは14歳になる花屋の息子だった。生まれつき股関節に障害があり、左足が少し不自由だった。

「いいよ。あんたはそこら辺で休んでいれば。あ、畑から好きな物持っていつて。今はエンドウ豆と、セロリとラディッシュがいい頃よ。あ、あとタマネギ」

グレーテルはロバの轡くわに繋がれている綱を取って、からの荷台ごとバラ園の方へ引つ張っていく。ネリオはその後ろを付いてくる。

「ありがとう、でも、あんまり遅くなっても市場に間に合わなくなるから先に荷を積んじやつてからにするよ」

二人はバラの蕾の具合や、葉の付き方、枝ぶりについてああだこうだといいながら、ネリオが選んだ鉢を手際良く荷台に移していった。それから、グレーテルは彼を畑に連れて行き、約束通りカゴに野菜をたくさん入れて、それも荷台に置いた。ネリオは半ズボンのポケットからバラの代金の入った小袋をグレーテルに渡した。それを受け取るために伸ばしたグレーテルの腕に目を留め、彼は「あれ」と小さく声を上げた。

「グレーテル、虫に刺されたの？ 肘のここ、内側が赤くなってる」

グレーテルも少年の指差す先に視線を落とすと、確かに肘の内側に一点、淡い斑紋が浮いていた。それに初めて気がついた彼女は狼狽し、腕を返した。

「あ、そ、そうなの。畑をいじっているといつの間にかやられちゃ

うのよ」

「そう。女の子なんだから気をつけなよ。毒虫にも気をつけなきゃね。司祭様がいい塗り薬を持っているよ。ぼくもこの間刺されて指が腫れちゃったとき、司祭様に貰った薬ですぐによくなったんだ」

「あ……そう？　じゃあ、今度貰いにいかなきゃ」

答えながら、たぶん、その薬はこの淡い染みには効果がないだろうと思った。自分の体中に跡をつける”フロリアン”という虫に効く薬はどこを探しても無いはずだ。

「そうだ」

ネリオは再びポケットを探ると、もうひとつ小さな袋を出し、グレーテルに握らせた。グレーテルは袋の口を開けて中を覗いた。小さな茶色い丸い玉がいくつか入っていた。

「少しだけだね、お裾分け。いつも美味しい野菜をありがとう。それ、バラのいい肥料なんだ。うちでも最近使っているんだけど、びっくりするくらい成長が早くなるんだ。試してみてよ」

そう言って少年は顔全体で笑うと、ロバの引き綱を取って街に戻っていった。グレーテルは早速バラ園に戻り、枝の細いバラの鉢のいくつかに貰ったばかりの肥料を指で押し込んだ。そのついでに手入れを済ませ、開いた花の枝を切っていると目の端に人影をとらえた。

光と芳香の充満するバラ園の、入り口に立つその人はフロリアンだった。気がつけばもうすぐ昼食どきだった。花をいじっている時は無心になり、つい時間の経つのを忘れてしまう。

「ただいま」

彼はグレーテルに近づき、頬に手を添えると額にキスを落とした。グレーテルは目を閉じてその感触を一点に味わいながら

「おかえり」

と漏らす。身を離れたフロリアンは麻袋を少し持ち上げてみせた。

「お土産あるよ。家に入ろう」

「うん。すぐにご飯の支度するね」

グレーテルはバラの枝を手に、フロリアンの隣に身を寄せて共にバラ園を後にした。

テーブルの上にフロリアンは贈り物をひとつずつ出していった。葡萄酒がひと瓶。まだ温かい焼きたての香ばしいパン。それから包まれた紙を広げると、バターと砂糖をたっぷり使って焼き上げられた金色のクッキー。

「ああ、あとこれ……」

フロリアンはポケットから出した物をグレーテルの手のひらに置いた。絹の、水色のリボンだった。グレーテルはそのすべすべした光沢のある生地の上に指を滑らせた。

「きれい……」

「気に入った？」

フロリアンは彼女の顔を覗き込みながら、満足そうに目を細めた。「うん。ありがとう」

グレーテルはフロリアンの首に腕を回した。やっぱり自分は彼が好きだ。たとえ彼が悪魔であろうと、彼が好きでたまらない。何も贈り物ひとつで心が動いたわけではない。今自分の目の前にいる、自分のもとに戻って来た実感を抱きしめたかった。

「それはよかった。つけてやるよ」

一旦フロリアンから身を引いたグレーテルに後ろを向かせ、豊かな三つ編みにフロリアンは器用にリボンを結びつけた。「ほら」と髪の毛を彼女の前に垂らす。リボンが結ばれた髪を手に取り、見とれて俯くグレーテルのうなじにフロリアンは顔を傾けて唇を沿わせた。「あっ」彼女の体が小さく震えた。フロリアンはそんなことは意に介さず唇を押し付けたまま

「寂しかった？」

とだけ言った。フロリアンの腕の中で固まったまま、グレーテルは「うん」と言うのがやっとだった。

「それはよかった」

フロリアンの言葉に思わずグレーテルは振り向いていた。

「よくないよ！」

彼はムキになったグレーテルをにやにやと見下ろしながら、

「『寂しくなかった』って言われたらオレに取ってぜんぜん”よくない”だろ」

「そ、そうなの……？」

ぎゅつと彼に再び抱きしめられ、嬉しさを隠そうと俯くグレーテルの赤く染まつた耳もとで、フロリアンは囁いた。

「早く飯にしようぜ。それから、話しておきたいことがある。……あんまり大したことじゃないけど」

あんまり大したことじゃない、その声の響きに不安が沸き上がるのはなぜだろう。でも、彼がそういうなら、きっとそうなのだろう。彼はいつも自分に正直だった。どんなことでも、どんなときでもグレーテルにはその事実を、目の前の悪魔を信じる術しかないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5623t/>

Antagonisten

2011年8月3日03時28分発行